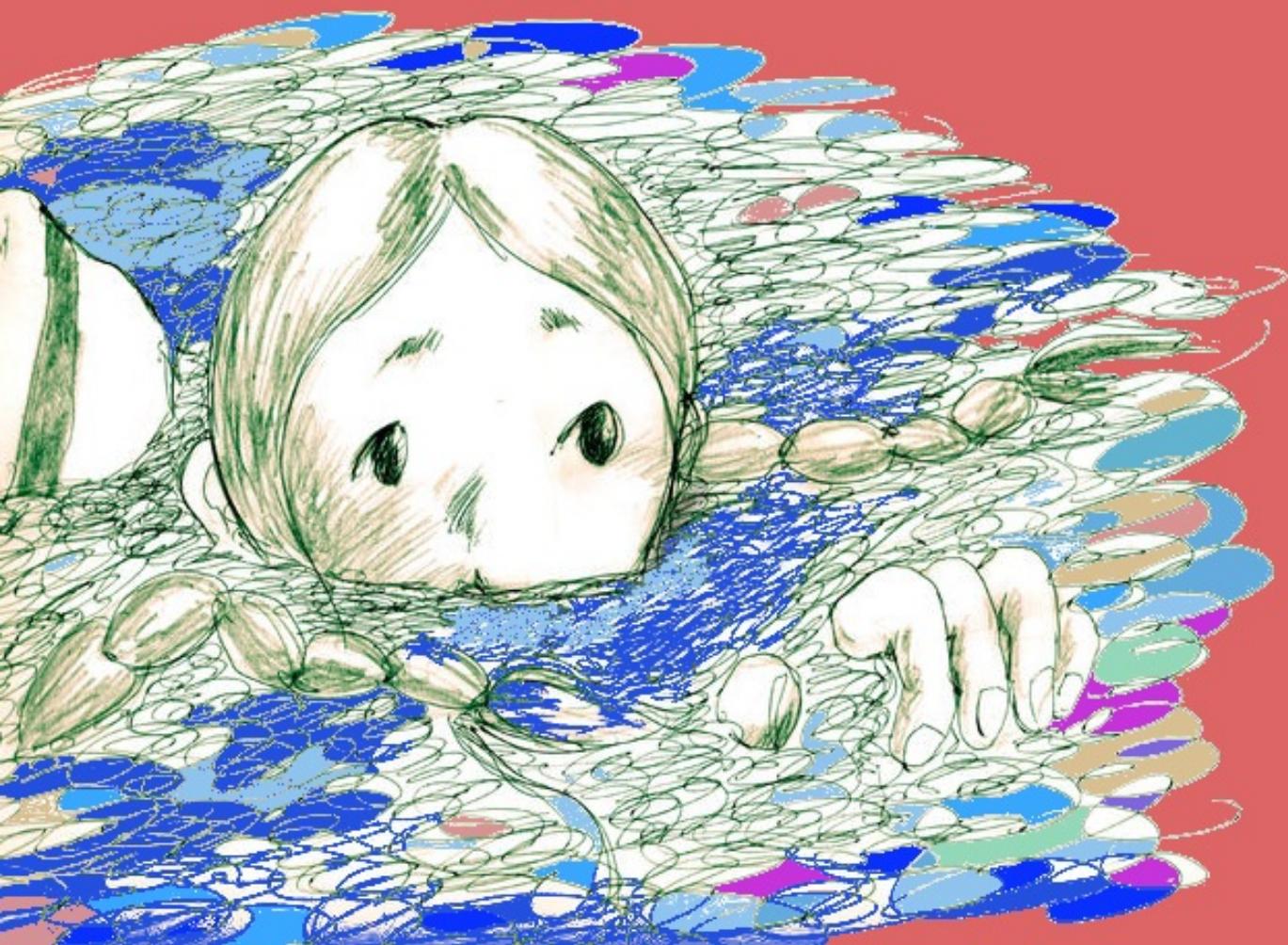


み
ず
う
み



みずうみ

「お姉ちゃん、それヒゲ？」

夕食の時に妹が言った。

「マジ？」

私はとっさに鼻の下に手を伸ばした。上唇に沿って指を進めてみると、たしかに微妙な引っかかりがある。そういえばここ数日は鏡も見していない。髪はずいぶん梳かしていないから、寝癖が直るのは大抵その日の入浴時になった。服は一日じゅう寝間着。上はTシャツだから着替えるけれど、よく考えれば下のジャージはもう一週間以上履いている気がする。股の間に卵の黄身がシミになって残っていた。

「ほんとだ、やばいね」

「ホルモンバランス崩れてんだって、そういうの。不規則な生活してるからだよ」

「そー……だね」

「そうだよ」

「……でも、せっかくだから、後でちょびヒゲに揃えてみようかな」

妹、そして母もくすりとも笑わなかった。

にぎやかなテレビ番組の音と寒々しい団欒、という組み合わせがまるでテレビドラマのワンシーンみたいだと思う。

テーブルには白飯と味噌汁、焼き鰯と茄子の煮浸しが並んでいた。

妹の皿には、頭と骨、尾びれだけになった鰯が横たわっている。そしてほぐされた身の方はごっそり白飯に盛り、その上から醤油を一回し。妹は食卓に焼き魚が出ると、食べ方をする。子供の頃からずっとだ。身をほぐしているうちに冷たくなってしまわないか、と誰かが口を出しても「どういう食べ方しようと勝手にしょ」と聞く耳を持たない。再来月に挙式を控えている妹だったが、嫁ぎ先でもその食べ方を続けるのだろうか、私は勝手に少し心配になった。

「お姉ちゃん、アスモデウスだよ」

妹がテレビを指して言った。流れていたのは携帯電話のコマーシャルだった。そのBGMに使われているのがアスモデウスというバンドの新譜で、ボーカルのEmiはそのコマーシャルにも出演していた。〈犬が家長である家族〉という斬新でユーモアに富んだ設定、かのようにみえて特別面白いことは何一つ起こらず、また大して何も起こらない事が逆に新しく面白い、という古くさい感覚によって作られた至極退屈なものだ。

「これ、もう聴いた？」

「まだだね」

「あ、じゃああたしの部屋にあるから持ってっていいよ。PCのiTunesの中に入ってるから。CDはさ、今トモヤに貸してんの。最近、あたしの影響ではまってるみたい。カラオケでも超歌うしね。っていうかさ、式の入場曲にも使おうとか言い出してんの。影響うけすぎだよ」

そうなんだ、と相槌を打ちながら、自分だってそうだったじゃないかと思う。

そもそも初めにアスモデウスを聴いていたのは私だ。インディーズ時代のアルバムやライブ

のDVDを貸しているうちに、いつの間にか妹の方が熱心なファンになったのだ。また、ここ数年は頻繁にライブにも足を運んでいるらしく、私よりも断然彼らに詳しい。

「メジャーになってから、こうやってすぐ売れるってすごいよね。古株のファンからしたらちょっとさみしいけど」

「だね」

今や私は新しいシングルやアルバムが発売されても、店で試聴するだけで購入は見送っていた。無職の自分にそんな経済的余裕はなかった。

「新曲はちょっと売れ線っぽいけど、聴いてるうちにいい曲な気がしてくると思うよ」

妹が言うのだから、きっとそうなのだろうと思う。

これはアスモデウスの件だけでなく、私たち姉妹の立場は、ここ数年ですっかり逆転していた。妹は文具メーカーに就職して三年、職場のつながりで知り合った有川トモヤという青年と今年の秋に結婚する。結婚後も仕事は続けるらしい。本人曰く仕事は楽しいし職場の仲間と離れるのも嫌だから、子供ができてでも続けていきたいとのことだった。

配管工の父が体を壊して入院して以降、我が家の財源の大半は妹の給与で賄われていた。それを当然のように受け入れ、また結婚後も入金を続けてくれるという妹は、わざわざ私と比較するまでもなく立派な、まぶしい限りの社会人であり、焼き魚の食べ方がおかしいくらいことくらいはちっとも問題ではないのだ。

私はダンボールのひしめく妹の部屋に入り、ベッドの上に雑に置かれたPCの電源を入れた。USBを差し込み、アスモデウスの曲をコピーする。

その間、反射的に再生マークに矢印を動かしたが、ぎりぎりのところで思いとどまった。妹のPCで聴いたら、まさに妹が予想した通りの感想を抱きそうな気がしたからだ。

自分の部屋に戻って、灯りをつける。電灯のちらつきで、机に置かれた紙が長方形に光った。

今日はほとんどの時間、そのA4用紙と格闘していた。タウンワークを開くのも2年ぶりだった。

妹の結婚式に際し、ニートからせめてフリーターに肩書きを修正しておきたい。そんな理由から私は二年五ヶ月振りにアルバイトの面接を受ける決心をした——と、いうのは妹思いの姉という鑄型にそって流し込んだ出来損ないの建前で、実際には何でもよかった。何でもいいから踏み出すきっかけが欲しかった。

名前性別電話番号住所学歴。そこまでは既に四五回記入したから自動筆記みたいに下書きなしですらすら書ける。何しろ、私はそれらをちゃんと持っていた。名前を、性別を、電話番号を。

問題は「長所」と「特技」。手元にないものは、いくら探してもないのだった。

*

「長所、滑舌の良さ。特技……節約ね」

バイトの面接官は二種類のタイプに分かれる。ざっと履歴書を見て直感で決めるタイプと、履歴書にくまなく眼を通し、ひとつひとつ点検するみたいに質問してくるタイプ。ボールペンをリズムカルにノックし、組んだ足をぶらつかせる社員の男はあきらかに後者だった。

「なんか、特別やってる事とかありますか？ 家で」

見たところ四十後半で、むちむちした赤ん坊のような肥満体。表情は常時にこやかだが眼の下には老いを示すふくらみが出ていた。やや口臭がきついのは、分析するにコーヒーの過剰摂取による胃の荒れとタバコのミックスだろう。

私が中学の頃、同様の口臭を放つ教師がいた。たしか岡島という名の数学教師だった。

「僕とかも結構ね、一時期はまったんですよ。いまでも家電の電源落とす時はコンセント抜いて、待機電力使わないようにしてますね」

岡島似の社員はまた、雑談好きらしかった。きっと若いバイトの子らとのバーベキューや飲み会を自ら企画し、絡みがしつこくてうっとうしがられても、その事自体を持ちネタとしてまた絡んでくるような、心のふれあいのがめついタイプに違いない。

「光井さん、どう？」

「え」

「えっ、て。節約やってるんだよね」

「あっはい。嘘じゃないです。本当にやってます」

「うん、そうだろうね。で、具体的にはどういう？」

「すいません……。あ、いえ、すいませんっていうのは、やってませんって事じゃなくて、とっさに、こう、パツと思いつけない事がすいませんっていう」

「いいよ。ゆっくり思い出して。面白いね、光井さん」

岡島似の社員はガラステーブルに置かれた湯のみに手を伸ばした。どういうわけか、今のところ好印象を抱かれているようだった。節約という特技がこの会社の「ビル清掃」という業務内容に役に立つのか、そもそもそれは特技にカテゴライズされるのかという点はさほど気にしていないらしい。

「たとえば駅でもらうポケットティッシュをケースに詰めておく、とか」

「あっ……はい」

「ウチでもやってたよ。っていうか、正確にはウチの奥さんが」

彼は微笑を湛えたまま、ふたたび履歴書に目を落とした。

「ここの仕事、意外と体力がいるんだけど大丈夫かな？ まあ女の子の応募はたまにあるし、戦力になってる子も多いから男子だけ採るっていう風にはしてないんだけど」

「あ、大丈夫です」

「部活とか何かやってた？ 運動とか」

「いえ、やっ……てないです」

じゃあ、どうして大丈夫なのか。真っ先に自分で思う。だからきっと同じ事を思われている

はず。

「まあでも、大丈夫だよ。ウチ、入ってくる子はほとんど未経験者だから。先に入ってる子たちも結構丁寧に教えてくれる方だと思うし。慣れれば、まあ単純作業だからね。あとショッピングモールとか介護施設とかのフロアの清掃とか、一日中やって全部終わった時は相当気持ちいいしね」

彼は言った。その一言が、その口から放たれた瞬間にああもう、だめになると私は確信した。「ティッシュ」という単語が飛び出した時はかなり瀬戸際に追いやられたが、どうにかこらえた。が、もうだめだ。

私の眼前に、湖がぱっくりと口を開いた。

「未経験者」だなんて。

「先に」「入っている」子たちが「丁寧に教えてくれる」

「一日中やって」「全部終わった時は」「相当気持ちいい」だなんて。

そもそも、ビル「清掃」だなんて。

ぷつぷつと言葉が浮かんで弾けるたびごとに水面は広がっていく。湖は私のつま先から視界の届かぬ地平へと一挙に、空に引っ掴まれたみたいにびゅーんと延び、彼の足の裏などはすぐにひたひたになり、衝立を越え、壁を抜け、街路へと抜ける。視野のほとんどはエメラルドグリーン一色、ほかには何も見えなくなる。

そして、それに比例するように私の体は、妙に「じん」としてくる。まるですぐ隣で巨大な鐘が打ち鳴らされたみたいだ。

……大抵の場合、単語が水源であった。「棒」「穴」は言わずもがな、「口で」「下の」も湖。「液」「はなびら」、「手ぶらで」「賃貸」も湖。症状は年を重ねるごとに悪化の一途をたどっているようで、近頃では「お歳暮」「シンポジウム」「仲見世通り」と一見なんでもない語でもだめになった。

湖を前にすると、私はもう何も手につかなくなる。

できる事といえば、水面の際限なく広がる様をただひたすら、最後まで見届けるのみだ。

私が最近部屋を出られるようになったのも、父が入院しているおかげだった。父が帰ってくればまた、部屋にこもるしかない。いつどこで湖が広がるかはわからないのだ。

「私が私でなくなる」ことが、ささいなきっかけで頻繁に起こる。それはもう恐怖以外の何ものでもなかった。

目の前の岡島似の男。紳士ぶったこの男にも、樹木のうろに隠れたりスのような「おたから」がひそんでいるのだ。

……そう考えてみたらこのスーツは何て湖なんだろう。このストライプのネクタイ、襟のよれたシャツ、黒い無地の靴下なんてかえってあからさまなくらいだ。

「どうかしました？」

まじめくさった口調で彼は言った。

私は迷わずその口に噛みつくような接吻をした。

思った通りヤニ臭い。すぐに舌で迎えに行くが、さすがに応じないので代わりに茄子色に変色した歯茎をそろっと舐めてあげた。その味は岡島とは少し違った。臭いは同じなのに不思議だ。私はソムリエさながらに頬の内側で唾液を味わった。酸味の中に隠れたサルビアの蜜みたいにけだるい風味は、むしろトモヤに近い。

そういえば、私はどうして予定通りバイトの面接になんて来ているのだろう。もう妹の結婚式には出席する必要はなくなったのに。いまさらバイトが決まってどうなるというのだ。

「ちょっと！」

肩を突き飛ばされた私は、片足をソファの肘掛けにぶつけて尻餅をついた。彼は立ち上がり、すばやく周囲を伺った。のどかに開いていた眉根は痛ましく眉間に集まっていた。

それからあらためて私を見た。それは少なくとも、人間に向ける眼差しではなかった。ちょうど一昨日の晩、妹もそんな眼で私を見たものだった。そして鶴のような喉をふるわせて「売女」と口にした。

そのときも私は今みたいに、アスモデウスの新曲を脳内でプレイしていた。

相も変わらず若者の色恋がテーマの陳腐な歌詞。耳から耳へと抜けていくありきたりなメロディーライン。鼻炎を疑う女性ボーカル。

それを聴いている時だけ、私は平静で居られた。

理屈はわからないがアスモデウスの曲を聴いていると、次第に潮が引き、あたりが徐々に事務所風景に戻っていくのだ。地面が顔を出し、流されていたテーブル、観葉植物、スリッパが定位置に帰ってくる。

私にはこのバンドの曲を愛する事情があった。

街中で彼らの曲が流れたら、どんなにいいか。だってもう湖を見なくて済む。

そうしたら私は何だって好きなようにできる。

バイトの面接にもきつと受かる。妹の、魚の食べ方だって注意できる。ヒゲだって生えてこない。夢なんてもちろん叶う。

「合否……合否は、追って電話で連絡します。今日はもうこれで」

彼は息を整え、慇懃な態度を持ち直して私に手を差し伸べてきた。

私はその手をかわして、ズボンのファスナーに手を伸ばす。ちいさな暖炉に手をかざすように、秘められた「おたから」を両手で包んだ。見慣れた湖のほとりで。

新曲は聴いたばかりだったから、まだあまり覚えていなかった。